

## 練成問題

- (1) (例) 病気の母をお見舞いするため。  
 (2) そんなことを考えると  
 (3) イ  
 (4) はっきり記憶に浮かぶ  
 (5) ウ  
 (6) ア  
 (7) ア  
 (8) (例) 自分の母親が死んでも悲しくないという人間。  
 (9) ウ  
 (10) 母がその時どんな記憶もある。  
 (11) イ

## 解説

(1)・(2) 洋一は、「お母さんが死んでも悲しくない」というかつての兄の言葉を思い出して、「兄がすぐに帰って来るかどうか、いよいよ怪しい」という気持ちになっています。ここから、母の病気が、兄が家へ帰ってくるこの原因になっているとわかります。「いよいよ怪しい」の「いよいよ」は、兄が帰ってこないのではないかとという洋一の不安の高まりを表現しています。

(5) 「ただ父が違っているといえば、こんな思い出が残っている」という語りから、「こんな思い出」が、複雑な家庭事情に関する出来事として取り上げられていることがわかります。血のつながりがあつて自分に近い存在だと思っていた母が、夫賢造との子である洋一をかばい、自分をこづいたことに、兄は激高しています。これらの出来事から、今の洋一

は、母に裏切られたと感じた兄が、母にうらみ・にくしみの念を抱いているのではないかと考え、果たして兄は母の見舞いに帰ってくるだろうか心配しています。

(6) ①の「彼」が兄弟のどちらを指しているのかは文脈上では判別しづらいところなので、②③から判断するとよいでしょう。本文全体では一貫して、洋一を「彼」、慎太郎を「兄」と書き分ける配慮がなされているので、①の「彼」も、ほかの箇所と同様に洋一を指していると考えるのが自然でしょう。

(9) 「皮肉」ということから、「おや、(母親が病気だというのに、勉強もせず、のんきに) 昼寝かえ」と、叔母の言葉の言外に込められた意味を読み取ることができます。

(10) 「小学校にいる時分」の兄弟喧嘩が描かれた場面はどこまでか、さらに、「三年前の九月」の銀座での場面が描かれているのはどこからか、と考えましょう。

(11) イの文は、本文中の「いや、母が兄を連れて再縁したということさえ、彼が知るようになったのは、割合に新しいことだった」に合っています。工の文は、本文中の「この春以来顔を見ない」に合っていません。本文では、母が病気になり、家を出て暮らしていた兄慎太郎の帰りを待つ弟洋一の気持ちを中心に描かれています。兄弟の実際の父親が違うという複雑な家庭事情を意識して、母と兄との確執を心配する洋一の心情を読み取ってください。